

やわらかボールといち
ねんせんそう

Jどたま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

連邦軍が極秘裏に開発した超兵器

その名もやわらかボール！

この物語はやわらかボールとかいう謎の兵器が一年戦争ですごい頑張るお話である！

【注意】

微妙に兵器開発時期や戦史スケジュールが原作とは違う場面が多々あります。

原作キャラが性格などを含めてまったく別物になっている可能性がありますので、そういったものが苦手な方はご注意ください。

また、今回初投稿になりますので気長に気軽に読んでいただけたら幸いです

目次

やわらかボール 大地に立たない	
1	
やわらかボールとV作戦	14
やわらかボール やっぱり大地に立たない	
い	19
はじめてのおつかい	24
ガルマ 散らない	37
やわらかボールとククルス・ドアンの島	
(前篇)	45
やわらかボールとククルス・ドアンの島	
(後編)	54

やわらかボール 大地に立たない

ゴツプ「困った。困ったぞ。」

後にルウム戦役と呼ばれる会戦で連邦軍宇宙艦隊は数に劣るジオン軍にそりやあもうコテンパンにやられたのでした。

その上、最高指揮官であるレビル將軍がジオン軍に捕まってしまい、指揮系統も大混乱。

ティアンム「うむ。困ったなあ」

かわって指揮をとったティアンム中將率いる残存宇宙艦隊がどうかこうにか必死に抵抗して

ジオン軍が連邦軍本部ジャブローを狙って仕掛けたコロニー落としを阻止したんだけれども

そのコロニーは三つに分かれて北米やオーストラリアやいろんなところに落ちちゃったので

そりやあもう、地球は大混乱ですよ。

ゴツプ「で、連邦議会はジオンの独立くらい認めたらええやん？って雰囲気で講

和条件も殆ど飲む気でいる」

ティアンム「うむ。ジオンのコロニー落としのせいで人がめっちゃ亡くなったからな。議会がビビるのも無理はあるまい」

ゴツプ「だが、講和条件を飲んでみる。ジオン独立どころか地球連邦が瓦解しかねぞ」

ティアンム「ぶっちゃけ、あれ、事実上の降伏勧告だもんなあ」

そうなのでした。先のルウム戦役で大勝利をあげたジオン軍は連邦軍に降伏勧告を行い

大打撃を受けた連邦軍はそれを飲むしかないとおもわれていたのです。

ゴツプ「とりあえず、ティアンムが出した連邦宇宙艦隊再建計画は予算通るようにしといたでー」

ティアンム「ゴツプまじ有能」

そんな中、連邦の降伏という事態を避けようとゴツプさんとティアンムさんはマジ頑張っていたのでした。

ゴツプ「でもなあ。ジオンの開発したあの、ザクとかいうモビルスーツ。あれに対抗できないと戦争続けても負けるんじゃない？」

ティアンム「とりあえず、新型制宙機のセイバーフィッシュなら少しはザク相手でも

対抗できるみたいだから、新しく建造する戦艦にはそういった空母としての機能も兼ねるよう設計させといた」

ゴツプ「ティアアンムまじ有能：といたいところだけど、それだけじゃあ決め手にかけない？」

ティアアンム「うむ。そこでちよつと考えがある。この作業用モビルポッドってあるだろ？そいつらに長射程砲を載せただけの兵器を設計した」

ゴツプ「ふむ。ハッキリ言って、動く棺桶だな」

ティアアンム「こいつら一機一機はともかくに対抗できるような代物ではないんだがな？安いし、しかもすぐに大量に作れる。」

ゴツプ「なるほど、物量作戦というわけか？」

ティアアンム「これをRB-79。ボールと名付けたのだが、セイバーフィッシュでザクを遅滞させている間に、大量に用意したボールで弾幕を張ってザクの射程外から攻撃する。これなら対抗の目もでてこよう」

ゴツプ「ティアアンムぐう有能」

ティアアンム「現状これ以上の案はあるまいよ。レベルのヤツがいてくれれば、また違った策も出せるかもしれないがな」

ゴツプ「そうだな。とりあえず、セイバーフィッシュとボールを各軍事工廠で全力生

産するよう指示だしておく。予算はどうかぶんどってくるわ」

ティアンム「ゴツプぐう有能」

こうして、どうにか戦備を整えることで連邦の降伏を避けようと頑張るゴツプさんとティアンムさんでした…

が

ゴツプ「ちくしよおおおおお！どいつもコイツもひよりやがって!?今、講和を結んだらジオンに地球を好き勝手されると何故わからん!!」

先のコロニー落としてに恐怖した地球連邦議会は講和派が多数を占めていた。

ゴツプ「こうなれば…もう手段は選ばない…。正攻法が通じぬならば正攻法いがないで墮とすまでよ…」

後の歴史家はこう語る

ゴツプまじ有能 と

彼は、議員一人一人を説得した。

ジオンの危険性を説き、自分達の勝利の可能性を説き、

それでも通じぬ相手にはスキャンダルでもなんでもチラつかせ

ありとあらゆる手段でもって議員達を説き伏せて、講和条約の調印を阻止し、戦時条約の締結のみにとどめたのである

レビル「あれ？ワシのジオンに兵なしっていう演説は？」
ありません

どうにかゴツプの活躍により降伏を免れた地球連邦
しかし、ゴツプの疲労はピークに達していた。

ゴツプ「あー…もう癒されたい…。戦争なんかどーでもいい。そういやあアニメすっかり溜めてたなあ。録画消化しよつと」(リモコンピッ

ダキシメテー ギンガノハチエマレー！

このとき、モニターに映し出された映像にゴツプは天啓を見た気がした。

ゴツプ「そうだよ…。戦わなくても、相手の戦意を削げばいいじゃん！戦わなくてもいいくらいに…！」

疲労の極限に達していた彼は正常な判断ができなくなっていたのかもしれない。

ゴツプ「そうだ…。ボール一機と予算がちよびつと残ってたな。これを使って、こうして、こうだっ！」

かくして、ゴツプ大將肝いりの計画として『ボールを使って敵の戦意を削ぐ兵器を作れ！』というなんだかよくわからない計画がスタートしてしまったのであった。

連邦が継戦を決定して数週間。

ゴップとティアンム以下、多くの者の尽力により連邦宇宙艦隊は急速に再建しつつあった。

連邦が継戦を決定したのにも、この生産力とそれを支える資源があつたことが大きな理由の一つであつた。

そんなある日のこと。

博士「ゴップ大将。できましたよ。ボールを使って敵の戦意を削ぐ兵器！」

ゴップ「へ？」

ゴップ自身もすっかり忘れていたのだが、そんな計画がありました

博士「いやー、苦労しましたよ。ほとんどボールを一から作り直したんですから」

ゴップ「うん？で、どんなんできたの？なんかジオンが地球への降下作戦を開始しそ

うだからさ、使えるならジオン降下部隊迎撃作戦に投入したいから見せて」

博士「わかりました。おーい、こっち来て挨拶しなさい」

(・ω・)ノ どうもこんにちわ

ゴップ「はい。こんにちわ。って何これ？」

そこには直径約13mくらいのまるっこいなにかがいた。

博士「はい。これが敵の戦意を削ぐ兵器！その名もツ」

シユババババツ！博士はかっこいいポーズを決めた

博士「やわらかボールです！」

(・ω・) やわらかボールです

ゴツプ「お、おう」

ゴツプは反応に困った。

ゴツプ「で、コイツ……」

博士「やわらかボールです」

ゴツプ「やわらかボールは何ができるの？」

博士「やわらかいです」

ゴツプ「お、おう」

博士「とりあえず触ってみてください」

(*・ω・)(ムニヨンムニヨン

ゴツプ「こ、これは…!?なんとという弾力!? つきたてのお餅でもこうはいくまい!? しかも、そこはかたなくヌクイ!?!」

博士「ふつつふ。これは私が依頼を受けてから5日で完成させた新型装甲、モフチタニウムを使いました！」

ゴツプ「それはそれで凄いな!?!」

博士「理論上、このもふもふ具合ならザクマシンガンの直撃を受けてもふによんと弾けます」えっへん

ゴツプ「まじ!?!じゃあ今いるボールの装甲を全部そのモフなんとかに…」

博士「モフチタニウムです」

ゴツプ「モフチタニウムに換装したら防御面ではかなり強化されるんじゃない?」

博士「それは無理です」

ゴツプ「は…?なんで」

柱一ω・)「ゴツプさんおこつてます。こわいです

博士「まず、モフチタニウムの原料がもうありません。全部使いきっちゃいました。

次に手に入るのは次の木星船団が戻ってきてからですかねー」

ゴツプ「oh…」

博士「それに、まだ問題があります。このモフチタニウムは寒冷地ではその柔軟性が失われます。」

柱一ω・)「はい。寒いのが苦手です

ゴツプ「つてちよつとまてーい!それじゃあ宇宙空間では…」

博士「はい。当然ですが活動できません。そんなことしたらやわらかボールがカチコチボールになります」

ゴツプ「まじかよ…」

(・ω・) まじです(えっへん

ゴツプ「いや、褒めてないからそんなドヤ顔しないでね」

(・ω・) さんねんです

ゴツプ「で、ゴイト…」

博士「やわらかボールです」

ゴツプ「やわらかボールは武装とかあるの？」

博士「ないです」

(・ω・) ないです

ゴツプ「ないのかよ!? つて180mm砲はどうした!?!」

博士「取り外しましたよ。」

(・ω・) あぶいです。

ゴツプ「取り外しましたよじゃない!? あと、あぶいじゃなくて危ないね!? それより武装なしでどうやって戦う気なのさ!?!」

博士「さあ?」

(?・ω・) さあ?!

ゴツプ「なるほど確かに戦意が削がれる…つていうか疲れる…」

とまあそんなおり

士官「ゴツプ大将！ソロモン宙域に集結していたジオンが地球降下ポイントへ向けて移動を開始しました！」

ゴツプ「まじかよこんな事してる場合じゃないわ、迎撃態勢の準備急ぐよう各方面に通達するぞ！」

博士「我々は」

(・ω・)？ どうしますか？

ゴツプ「君らはサイド6あたりでのんびり…じゃなくって運用テストでもしてなさい」

ゴツプ大将もこれ以上彼らの相手をしてるとさらに疲れそうなので、とりあえずサイド6に送っておくことにしました。

ゴツプ「あそこは中立コロニーってことになってるから皆と仲良くしてくれ」
(のっそのっそ)。。。 (・ω・) わかりました。さっそくいつてきます

博士「じゃ、行ってきますねー」

こうして、やわらかボールはサイド6へと向かうのでした。

さて、一方その頃

オペレーター「ティアンム中将！セイバーフィッシュ隊、押されています！」

ティアンム「ボール隊を後退させつつ引き撃ちさせる！ボール隊がザクに取り付かれ
たら終わりだぞ！」

衛星軌道上ではティアンム艦隊が奮戦を続けていた

ティアンム「くつ…！これ以上押し込まれればジオンのHLV突入を許してしまう
…かといって今突撃させればボール隊もセイバーフィッシュ隊も壊滅は免れまい
…」

しかし、奮戦空しくティアンム艦隊は後退を余儀なくされていた。

ティアンム「仕方があるまい。地上に降下したジオンは地上戦力に任せる！艦隊後退
！戦線の再構築急げ！！」

しかし、なおも襲い来るジオン軍ザク部隊！

ザク「ひやつはー！！蚊トンボどもがあっ！」

セイバーフィッシュ「うわーやーらーれーたー」

ザク「このまま後ろの丸っこいのをやってやるぜえ！」

ボール「ひ、ひい!？」

ついにボール隊に襲いかかるザク隊！

このままボール隊はザクに蹂躪されてしまうのか!？

…そのとき…!!

ザニー「レッツ!!ビイビイビイビイイルツ!!」

ザク隊へたつた一機突入する一機のモビルスーツ!

ザク「なんだとお!?連邦のモビルスーツとでもいうのか!?」

そのパイロットこそが

レビル「そう!それこそがワシ!レビル將軍じゃよ!!」

突然の敵モビルスーツ登場、突然の敵最高司令官の登場に混乱するザク隊

ザク「つていうかレビル!あんた捕まってただろ!」

レビル「逃げてきた!」

ザク「すげー簡潔すぎんだろ!」

レビル「あとこつそりザクのデータ連邦に送ってザニー作ってもらっておいた!!」

ザク「見張り仕事しろ!」

そんなわけで捕虜になってもタダでは起きない男、レビル將軍

レビル「ふっはっはっは!喰らえザクども!あたまあああ…ブウアアアアアルカ

ンツ!!」

ザニーの頭部から発射される60mmバルカン

ザク「いてててて、撤退いいい、撤退いいいいい」

突然のレビル將軍と敵MSの登場により撤退していくザク達

ティアンム「助かったけど、なんか別な頭痛の種が増えた」

まだ高笑いを続けるレビル將軍をみつつティアンム中將は頭を抱えるのでした。

やわらかボールとV作戦

レビル「なあなあ。ゴツプ。もつと強いMSが欲しい。ザニーじゃダメだ。新しいの作って」

ゴツプ「おいこら帰ってくるなりいきなりそれか。今、こっちは忙しいんだ。MSなんぞに予算割いてられるか」

ゴツプ大将は地球に降下したジオン軍を迎え撃つ準備でとても大忙しです。

レビル「だからな？MSと戦うならMSが一番だ。だからザクよりもすつげー強いMSを作ったら絶対勝てるって」

そんな簡単にザクよりもすつげー強いMSが作れたら苦労はしません。…が

レビル「ほら、ちよつとこれ見てくれ。ジオンから逃げるときにぶんどってきたザクのデータから流用して設計したMS案なんだけどき」

ゴツプ大将はレビル將軍の提示したMSコンセプトに目を通すと、

ゴツプ「お前、基本バカだけど頭いいよな」

レビル「照れるぜ」

ゴツプ「いや褒めてないからな」

レベル「このすっぱえ強いMSを作つてザクをボコろう大作戦を略してV作戦つて呼ぼう！」

ゴツプ「略してねえ!？」

こうして連邦軍は本格的なモビルスーツ開発計画を推し進める事になるのでした。一方その頃、サイド6では

カムラン「次！」

ザク・ワーカー「ザク・ワーカーです！軍事目的ではありません！」

カムラン「ダメ！武器がある！帰れ！」

ザク・ワーカー「そんなー」（すげすげ）

サイド6の検察官カムランさんがお仕事しつかり頑張つてました。

中立コロニーのサイド6には兵器は入れません。

カムラン「次！」

（．ω．）ノ やわらかボールです！

カムラン「よし！通れ！」

。。。 （．ω．） やったぜ。

でもやわらかボールは兵器だと思われませんでした。

こうして無事にサイド6へやって来たやわらかボール

博士「じゃあ、早速運用試験をはじめようか」

(?・ω・) なにをしたらいいですか？

博士「そうだね。まずは、ノボリを立てよう」

(つ・ω・)っ PPP のぼりたてます

博士「うんうん、さすがに元は作業用ポッド。上手に出来たね。」

(*・ω・) えっへん

何故かそのノボリには『やわらかボール参上！』とか『やわらかボール有ります』とか『ただいまやわらかボール実演中』とか書いてあるので

周囲の人達にとてもとても目立ってしまいました。

そんな事はお構いなしにやわらかボールと博士は運用試験を重ねていきました。

またまたところ変わって、今度はサイド7。

こちらでは、レビル将軍がV作戦を開始していた。

レビル「よし、テム・レイくん。予算と人員と資材は（ゴップが）用意した！」

テム・レイ「じゃあ早速ガンダムとガンキャノンとガンタンクつくりませうね」

レビル「頼んだ！」

テム・レイ「あっ!? しまった!?」

レビル「どうした!？」

テム・レイ「ガンタンクに頭バルカン付け忘れたあああああ?!?!?!」

レビル「何やっとなるんだ貴様あああああ?!?!?!」(バキイ

テム・レイ「殴ったね!?!親父にもぶたれたことないのに!!」

レビル「そりゃあ貴様の息子のセリフだろうがあああああ!!」(コブラツイスト

テム・レイ「ガンダムとガンキャノンにはちやんと頭バルカンつけたからかんにんしてええええええええ!」

レビル「しょうがないな。今回だけだぞ」

こうして、レビル將軍とテム・レイ博士は仲良くV作戦を進めていたのですが

ゴップ「レビル。いい加減帰ってきて地上迎撃作戦の指揮とつてくれないとそろそろヤバイぞ」

そうなのです。

連邦がモビルスーツ開発を進める間にもジオンは快進撃を続け

北米大陸やオデッサやアフリカ大陸の一部などを次々占領していったのです。

レビル「じゃあ、テム・レイくん。ワシ、地球に戻るけど、はよガンダム作ってね!」

テム・レイ「がんばります!」

このあたりで少しジオンの皆さんの様子も見てみましょうか。

ドズル「最近、連邦の連中がモビルスーツ開発を進めてるらしいな？」

アカハナ「みたいっすね」

ドズル「ちよつとお前、その計画阻止してこい」

アカハナ「わかりました」

ドズル中将から命令を受けたアカハナさん。

彼はジオンの中でも潜入工作のスペシャリストです。

まずは連邦がどこで兵器開発してるか調べてみることにしました。

アカハナ「えーつと、連邦軍ってどこで新兵器を開発していますか？つと」

さつそく彼はY a h o o知恵袋に投稿してみました。すると

アカハナ「なにになに？サイド6で連邦軍が新しい何かを開発しているだど!?早速潜入してみよう！」

アカハナさんは丁寧なお礼コメントを返信しベストアンサーをつける早速サイド6へ向かいました。

どうやらサイド6で運用テストを行っているやわらかボールとV作戦を勘違いしちゃったようです。

これは、やわらかボール大ピンチ!? 次回へ続くぞ!?

やわらかボール やっぱり大地に立たない

博士「はいー！やわらかボール実演中ですよー！寄つてらっしゃい見てらっしゃい！」

サイド6ではやわらかボールの運用テストが続いていました。

。。。 (・ω・) そうこうテストです

住民「おー。自転車くらいのスピードはでてるぞー」

(・ω・) つつ。ぶきょうんようテストです

住民「おー。ケンダマ上手だな」

最初は何やってるのか不思議に思ってたサイド6住民も、物珍しさに見物に集まるようになっていました。

こうして見物客も集まっていますので、サイド6で連邦軍が何かやっていると噂はジオンにまで知られていました。

アカハナ「そんなわけでサイド6にあるやわらかボール試験場へとやってきたのだ」

ジオン工員のアカハナさんもこの場にやってきていました。

アカハナ「しかし、このまんまるが連邦軍のモビルスーツ？」

。。。 (・ω・)ノ おうだんはどうをわたるときはてをあげましょう
子供たち「はい」

アカハナ「どうみてもモビルスーツ以外の何かな件」

とはいえ、やわからかボールが何なのかわからないと報告のしようもないので
アカハナさんは夜中にこっそり忍び込んでみることにしました。

なんとたつてアカハナさんは全身タイツ。潜入はお手の物です。

アカハナ「そんなわけでこっそり潜入してみたのですが」

オフトン——ω—— Z z z ::

アカハナ「ドズル中将。自分の中にある兵器の概念が崩れ去りそうです」

オフトン——ω——？

アカハナ「なんか目を覚ました件。っていうかパイロットは中にいるのか!？」

オフトン——ω——)ノ なかに だれも いませんよ。

アカハナ「中に誰もいなくても動くのか…。もうこれよくわかんねーな」

オフトン——ω——)とところで、どちらさまですか？

アカハナ「あ、申し遅れました。アカハナです。」

オフトン——ω——)人 どうも。アカハナさん。やわからかボールです

挨拶は大事。

オフトン—・ω・） どんなごようけんでしよう？

アカハナ「あ、えつと。そう。取材、取材だよー。」

オフトン—*・ω・） しゅぎい…。テレビかな（わくわく

アカハナ「で、早速教えてほしいんだけど、やわらかボールくんは一体なんなんだい？」

オフトン—・ω・）？ さあ？

ほんとなんなんでしょうね？

アカハナ「そうだ。美味しいお菓子があるのでお外でお話聞かせてもらえないかな？」

オフトン—・ω・） 知らない人についてっちゃいけませんって言われました。

アカハナ「（ちい!?!よい子め!?!）」

博士「うん？なんか声がするなあ。誰かきてるのかい？」

アカハナ「やべえ。逃げなきゃ」（すすすす

オフトン—・ω・）!!

博士「やわらか。起きてたのかい？誰か来てたのかな？」

ゝ、シ、ω、）ノシ はかせ！すごい！アカハナさんおとしなかつた！

博士「うん？アカハナさん？」

「ハ、シ、ウ、ノシ さつきまでいたの！すすすーってあつというまにいなくなつたの！」

博士「そうかそうかー。もしかしたらサンタさんもしれないねー」

オフトン「*・ω・」 アカハナさんまたきてくれるかなー

博士「いい子にしてたらきつとくるさー」

アカハナ「ふう。危ないトコだった。とりあえずドズル中將に報告するかな。」

アカハナさんはまとめた報告書をドズル中將に送りました。

すると、すぐに返信がありました。

ドズル「報告書読んだけど、これもうわかんねえな」

報告書：やわからかボールについて

まんまる。触るとすぐやわからかふかふかもちもち。

どうやらパイロットいなくても動くという不思議なもの。

移動速度は自転車くらい。

戦闘能力はなさそう。

たぶん、これ兵器じゃないつす。

ドズル「うーん、多分これV作戦のダミープランだろ」

アカハナ「だと思えます。で、どうします？」

ドズル「サイド6との関係悪化覚悟してまで仕掛ける事はないだろ。帰ってこーい」
アカハナ「いいんすか？」

ドズル「シヤアがたまたまサイド7でV作戦つぽいのを見つけたらしい」

アカハナ「それじゃあ、とりあえず戻りますね」

こうしてアカハナさんは帰っていききました。

一方でホワイトベース隊の皆さんはシヤアのおかげでえらい大変な目にあいました
が

いろいろあつて、どうにかこうにかサイド7を脱出することが出来ました。

そして、やわらかボール達は…

(・ω・) おてがみきました。

博士「えーと？なにになに？ゴツプ大将の胃がストレスでマツハだからジャブローまで

来て欲しい…つて書いてあるね」

(・ω・) おみまい いきます！

こうして本人も知らない間にピンチを脱出したやわらかボールは地球へ向かう事になりましたとき。

はじめてのおつかい

やわらかボール達がまだサイド6で頑張っていた頃、

地球では…

ゴツプ「とりあえず、地上戦ではこっちに一日の長つてやつがあるな。」

最初は地球に降下してきたザク達も地上戦ではちよびつと苦戦しました。

セイバーフィッシュ「地上用ブースターを装備したボクが制空権を確保します。」

フライマンタ「で、制空権が確保されたら高高度から爆撃します。」

61式戦車「で、俺が足止めすると」

ゴツプ「これで航空戦力がないジオン降下部隊なんて一ひねりだ！」

と、思っていた時期がゴツプ大将にもあつたのです。

ジオン降下部隊が作戦を開始してしばらくすると…

ドツプ「ヨロシクニキーwwww」

ドダイ「ヨロシクニキーwwww」

ドダイ+ザクII型「ヨロシクニキーwwww」

ゴツプ「おいこらレベル!?なんかやべえからさっさと戻ってこい!!」

こうして、レビル將軍がサイド7でテム・レイ博士とガンダムを作ってる間に地球は着々と侵攻されてるのでした。

レビル「いやいや、いい具合だよ？」

ゴップ「どこがだ!？」

レビル「まず、ジオンに橋頭保は確保されたし鉱物資源産地も抑えられた。だが、こんな広範囲の戦線維持できると思うか？」

ゴップ「なるほど。補給線は確かに伸びきっているだろうな。」

レビル「補給線が伸びれば伸びるほどジオンには不利になる。」

ゴップ「それはなんでだ？」

レビル「ジオンに兵なし！」

ゴップ「ほう？」

レビル「ジオンに兵なし!!」

ゴップ「なんで二回言った。」

レビル「だってこの演説したかったんだもん！」

たしかに補給線の伸びきったジオンと地上でもMSに対抗しきれない連邦軍。戦線は膠着状態に陥った。

その膠着状態の間にV作戦は着々と進んでいってました。

ついでにやわらかボールもサイド6でのんびりしていました。

レビル「これでウチのMSが完成したら勝つる!!」

と思っていたら、試作MSをジャブローに運搬する予定だったホワイトベースがシャアの妨害でジャブローじゃなくてジオン勢力圏内の北米に降下しちゃいました。

ゴツプ「マジっすか…」

かなりの予算を割いていたホワイトベース隊がジオン勢力圏に落ちた事でゴツプ大将のストレスゲージがマツハだったのです。

一方で全然脅威だと思われなかったやわらかボールは特に邪魔されることもなく予定通りジャブローに降下したのでした。

そんなこんなでジャブローに降下したやわらかボールは

(っ・ω・)っ そんなわけでゴツプさんふかふかします。

ゴツプ「ああ、癒されるんじやあ〜」

そろそろヤバかったゴツプ大将のストレス解消に役立っていたのです。

ストレス解消されたゴツプ大将も頑張ってお仕事しまくっていたのですが…ホワイトベース隊は孤立無援で大変なことになっていました。

コーウエン「ゴツプ大将。北米に落ちたホワイトベース隊には補給が必要ですよ。」

ゴツプ「補給してやったらなんとかなる?」

コーウエン「なるなる。」

ゴツプ「わかった。補給物資は手配する」

コーウエン「ゴツプ大将マジ有能」

ゴツプ「世辞はいい。だがどうやって補給物資を届けるんだ？」

コーウエン「補給部隊のエキスパート、マチルダ中尉に任せます。」

ゴツプ「そつか。じゃあ頑張ってもらおう」

コーウエン「ところでゴツプ大将。うしろのそれ、なんスか？」

(つ・ω・) つ ゴツプさんをふかふかしています。

ゴツプ「やわらかボールだ。」

(・ω・) ノ やわらかボールです。

コーウエン「ああ。それが噂の…」

ゴツプ「とてもふかふかなのでストレスフリーだ。」

コーウエン「お気に入りのところ、申し訳ないのですが…今回そのやわらかボールに

もホワイトベース補給作戦に参加してもらいたいです。」

ゴツプ「なん…だと…」

(・ω・) ?

ゴツプ「ななななななをさせるつもりだ」

コーウエン「マチルダ隊が単独でジオン勢力圏内を突破するのは非常に難しいでしょう。そこで、やわらかボールが陽動に出ます。」

ゴツプ「ちよつとまで!?!やわらかボールは戦力にはならんぞ!?!」

コーウエン「いえいえ。やわらかボールの装甲はザクマシンガンどころかザクバズーカの直撃を受けても平気という報告があがっています。」

ゴツプ「だが、いくらなんでも無茶がすぎるだろ!?!」

コーウエン「やわらかボールはマチルダ隊とは別方面に進出して、少しだけ敵の目をあつめたら速攻でジャブローに逃げ帰ってくるだけです。」

ゴツプ「ううむ…。しかし…。」

(・・ω・・)ノ いきます

ゴツプ「まじすか」

(・・ω・・)ノ ホワイトベースたすけます

こうしてホワイトベース補給作戦フィーチャリングやわらかボールが開始されました。

(*・ω・) かつこいいです

やわらかボールは大きなリユックを背負い、そしてそこには「ホワイトベース補給し隊」という旗が立っていました。

ちなみに、リュックの中身はんまい棒がたくさん入っています。

博士「じゃあ行こうか」

。。。わい。

そして、割と危険なはじめてのお遣いにてかけるやわらかボールはたくさん、連邦将官の敬礼に見送られてお出かけしていきます。

博士「あ、歩くの疲れるから、コクピットに乗せてくれるかい？」

(・ω・) わかりました。

連邦将官s 「コクピットあつたの?!?!」

博士「そりゃあ、やわらかボールはボールだからね。コクピットくらいあるさ。みんな

なやわらかボールを何だと思ってるんだい？」

連邦将官s 「こっちが訊きてーよ?!?!」

博士「そして、このコクピットはぬくぬくふかふかで居住性ではどのMSもかなわな
いぞ」(えっへん

ゴツプ「(しまった!?!その手があつたかあああああ!?!)」

ゴツプ大將はやわらかボールに乗るといふ発想はなかつたようです。残念でしたね。

こうしてやわらかボールは単独ではじめてのお遣いに向かいました。

博士「ふーふふふんふん♪ふふふつふふん♪」

。。。。。(・ω・) ふふふ〜ん♪ふふふ〜ん♪

博士とやわらかボールは楽しく鼻歌なんて歌いながら進んでいきます。

やはり北米大陸に近づくと

ザク「見張りしてます。」

ザクが見張りしてました。

(；・ω・) どうしよう…

やわらかボールは考えました。

(・ω・) ノ こっそりいきます

やわらかボールはこっそりとザクの後ろを通ることにしました。

；；；；；；(・ω・) アカハナさんのまねっこです(すそそそそ

ザク「うん？なんだ気のせいかな」

(・ω・) b? やったぜ

と、なんとか見張りのザク達をやりすごしながら進んでいきますが…

? || || || || (ゝシ；ω；) ノシ ひいーん とうとうみつけました

ザクA「怪しいまるっこいのがいるぞー！」

ザクB「ホワイトベースに補給し隊って書いてあるぞー！」

ザクC「ホワイトベースってなんだ？」

ザクD「なんかわからんけどとりあえず撃て撃てー」

ザクマシンガンとかザクバズーカとかフツドミサイルとか無茶苦茶撃たれまくるや
わからかボールだったのですが

(.ω.)(.:.)(ぼよよん)

と、全ての攻撃を弾いてしまいました。

ザクA「こうなったら、もつと応援を呼んで囲んで捕まえるぞー!」

ザクBCD「わかったー!」

ドップ「応援きたよ」

ドダイ「きたよ」

マゼラアタック「きたよ」

ルツグン「きたよ」

ワツパ「きたよ」

と、たくさんのジオン軍に囲まれてしまいました。

博士「ふむ。そろそろ頃合いかな?」

? || || || || (ゝシ; ω;) ノシ どうしますか?

博士「ふっふっふ。奥の手を使う時が来た! やわからかボール最速の移動手段!!!」

(.ω.)? それは?

博士「いくぞー!!秘密ボタンぽちっとなー!!」

博士はやわらかボールのボタンを押しました。そこにはこう書いてありました。

『転がる』と

三 (ω) 三 (ε :) 三 (ω) 三 (: 3) 三 (ω) 三 (ε :

ゴロゴロゴロゴロ

ザクA「転がったぞー!」

ザクBCD「速いぞ?!追いつけないぞ?!」

ドップ「下り坂だし仕方ないね」

ドダイ「そうだね。」

マゼラアタック「ドップやドダイで追いつけないってことは相当速いね」

ルググン「もうリーダーの外に出られちゃったよ」

ワツパ「見失ったね」

と、完全にジオン軍を振りきることに成功したのでした。

博士「ちなみにこの移動方法には一つ弱点があつてね」

三 (ω) 三 (ε :) 三 (ω) 三 (: 3) 三 (ω) 三 (ε :

なんですか?

博士「簡単には止まれないからどこまで行くのか私にもわからないことさ」

三(、ω、)三(ε：)三(。ω。)三(：3)三(、ω、)三(ε：)
 しよんなあああ(ゴロゴロゴロ)

場面はかわってマチルダ隊はやわからかボールの陽動もあつてか無事にホワイトベ
 スと接触していました。

ブライト「まじで補給助かりました。」

マチルダ「なんとか頑張つて一度西のヨーロッパ方面に抜けて欲しいの」

ブライト「わかりました。やってみます。」

と、マチルダ隊からの補給を受けたホワイトベースはニューヤーク方面へ進みます。

そこへ：

セイラ「ブライト。何かが高速で接近してくるわ」

ブライト「まじか。じゃあガンダムをスタンばつといて」

アムロ「らじやー」

三(、ω、)三(ε：)三(。ω。)三(：3)三(、ω、)三(ε：)

とまりません(ゴロゴロゴロ)

ブライト「あれなんぞ?」

セイラ「なんでしようね?」

ミライ「とりあえず止めてあげたら?」

アムロ「らじやー」

アムロはガンダムでやわらかボールをキャッチしてあげました。

(・ω・)ノ たすかりました。ありがとうございます

アムロ「ブライトー。なんかこの丸っこいの『ホワイトベースに補給し隊』って旗たつてるぞー?」

ブライト「連邦軍…味方…なのか?」

(・ω・)ノ そうです。ようどうです。(えっへん

アムロ「どういふことなんだ…。」

ブライト「それはこっちも訊きたいけど…とりあえず収容しとこう」

こうして、ホワイトベースに収容されたやわらかボール

博士はブリッジに事情説明に行くのですが

やわらかボールはMSデッキにとりあえず収容されました。

ハヤト「うーん?で、このまるっこいのは何をしにきたんですかね?」

カイ「補給はさつきマチルダさんに沢山もらったしなあ?」

(っ・ω・)っ んまいぼう たくさんあります

ハヤト「つてこれ全部砕けちゃつてるじゃありませんか!?!」

カイ「おいおい、これどうするんだよ!?!」

（ふ・わ・）ごめんなさい

ジオン軍を振りきる為に転がったやわらかボールは勢い余ってホワイトベースのところまで本当についちゃいました。

そしてダミー補給物資のんまい棒も転がってるうちに全部砕けてしまっていたのでした

リユウ「ハヤトもカイもやめろ。」

ハヤト・カイ「リユウさん！」

リユウ「ブライイトから事情を聞いたが、どうやらマチルダ隊を俺らのところに届けるためにこのまるっこいのが囹役になってくれてたらしい」

ハヤト「そ、そうだったのですか」

リユウ「それに、砕けたんまい棒も……。」

リユウさんは二人に炊きたての白米を差し出し明太子味とタコヤキ味の袋の中身をそれぞれにふりかけました。

リユウ「食ってみろ。美味いから」

ハヤト・カイ「……んまい」

リユウ「だろ？まだまだ色んな味があるし、ミックスまで楽しめる」

ハヤト・カイ「!？」

リュウ「わかったら、このまるっこいのに礼言つとけ。補給ありがとな」
ハヤト・カイ「ありがとう！」

(*・ω・) ||3 どういたしまして！

こうして、やわらかボールはリュウさん達にたくさん褒めてもらえて、はじめてのお遣いは大成功です。

よかったね！やわらかボール!!

ゴツプ「ぜんぜんよくない！やわらかボールはよ帰ってきてー!!」

ガルマ 散らない

さて、ホワイトベース隊とうっかり合流しちゃったやわらかボールですが…
割りと楽しく過ごしているようです

コタツー＊・ω・） すっごいぬくぬくです

リユウ「余つてた擬装用シートと電熱線で組み上げたやわらか用のコタツはいい具合
みたいだな」

博士「いやあ、助かるよ。MSデツキは寒そうだったからね」

カイ「コイツはぬくぬくだわふかふかだわで」

ハヤト「離れられなくなりますねえ」

と、MSデツキではカイとハヤトがダメになっていました。

コタツー・ω・）ノ こんにちは。やわらかボールです

・・） ハロデス

博士「はっはっは。新しい友達も出来たみたいだね。」

コタツーっ・ω・）っ・・）（きやつきや

博士「あのハロというのはアムロ君が作ったのかね？」

「アムロ「いや、元は市販されてるものを色々改造しただけです」

博士「ほうほう、見たところ中々手間をかけて改造してあるようだがうんぬんかんぬん」

アムロ「ということはやわらかボールもそんな感じでしょうんぬんかんぬん」

と何故か別なところでも交流が生まれたりしています。

ブライト「で、我々は大西洋へ抜けなくてはならないんだが…」

ミライ「このまま行くとニューヨーク方面を抜けなくてはならないわね」

セイラ「ジオンの基地がある地域の一つ…見逃してくれる程甘くはないと思うけれど」

と思つてると…

セイラ「ドップとガウの編隊をキャッチ！」

ブライト「ええい、仕方あるまい。この先の廢墟地帯へ進路をとれ。何とかやり過ぎすぞ。それとガンダム、ガンキャノン、ガンタンクをスタンバらせておけ！」

ミライ「やわらかボールは？」

ブライト「……のんびりしててもらえ」

セイラ「了解」

その頃のジオン軍

ガルマ「よし！木馬はこの先の廃墟地帯へ進路を向けたな。ほんじゃあシヤア、いちよホワイトベースのいぶり出し頼むぞ！」

シヤア「わかったー。」

ガルマ「ガンダムか木馬を見つけたら知らせろよ。ガウで仕留めてやる」
シヤア「ほいほい。ほんじゃあ勝利の栄光を君に」

で、再びホワイトベース

ブライト「運よくあつた雨天野球場跡にホワイトベースを隠したぞ！」

セイラ「それでガンタンクとガンキャノンと直掩に。ガンダムを陽動にだすのね？」
ブライト「そうだ。アムロ、ザクをホワイトベースから引き離してくれ。」

アムロ「らじやー。行ってきまーす」

ガルマ「うーん、木馬め。どこに隠れた？とりあえず絨毯爆撃していぶり出そうと思つてたんだが、出てこないな」

シヤア「こつちも今のところ見つけられないぞ」

といいつつも本当はシヤアは既にガンダムを見つけていました。

しかもガンダムの進路から逆算してホワイトベースまで見つけていたのです。

シヤア「うーん。アレ”をやるなら今が大チャンスなんだよな。やろうかなあー。でもガルマってあんなんだけど親友なんだよなー」

シヤアは悩んでいました。

シヤアは実はキヤスバルⅡレムⅡダイクンとかいうジオンの王子様だったので！
ところがデキンⅡザビをはじめとするザビ家に王位を篡奪され

自身は死んだ事にしてシヤアⅡアズナブルとして生き、ザビ家への復讐をする機会を
ずつとまっていたのです。

ところがどっこい

シヤア「(ガルマとは士官学校で出会って、なんかよくわからんが色々つかかられて
…その度になんだかんだ面白かったなー)」

そうなのです。ガルマはシヤアの数少ない友人なのでした。

シヤアは考えました。

考えた結果、こう結論付けました。

シヤア「やってから考えよう。なるようになるさ」

というわけでシヤアはホワイトベースにガルマのガウをやっつけさせる作戦を実行
にうつすことにしました。

シヤア「ガンダムみつけた。位置はこの辺な？ガウで仕留めてくれ」

ガルマ「よっしゃ！よくやったあ！」

と、ガルマの乗るガウがちょうどホワイトベースの前に出て無防備な背面を晒すよう

に誘導したのです

ガルマ「よし！ガンダムつけた！」

ブライト「絶好の射撃位置だ！砲座確固に照準！撃てー！！」

シヤアの誘いに乗ったガルマのガウはその一撃で致命傷を負ってしまいます。

ガルマ「ただではやられぬ！ガウを木馬にぶつけてやる！！」

シヤア「あ、あれ!?謀つたな!?シヤア!?つていわないの!?!」

ガルマ「へ？シヤア悪くないじゃん？後ろに木馬いるの気付かなかつたの私だし」

シヤア「このお坊つちやま育ちめええ!?少しは人疑えよ!?!つていうか君の生まれの不幸を呪うがいいとか言えないじゃん!!」

ガルマ「なんのことだシヤア!?!まあいいや！イセリナとか兄上とか姉上とか父上によろしく言つといて！ジーク・ジオン!!」

無理やりガウを反転させたガルマ。もう一息でホワイトベースと衝突しちやいそうです！

ブライト「ホワイトベース急速発進！回避いー！」

リュウ「間に合うのかよ!?!」

? || || || || (つ ・ ω ・) つ あぶい

そのとき、カタパルトから打ち出されたやわらかボールがガウを受け止めました。

さすがやわらかボール。やわらかいです。
しかも

(っ・ω・)っ なかにまだひとがいるのでたすけました

ガルマ「うーん」↑気絶中

でも、ガルマ大佐が戦死したと勘違いしたジオン軍は蜘蛛の子を散らすようにして逃げていきました。

ブライト「危ないところだった。ガンダムとやわらかボールを回収したらこのまま大西洋へ逃げよう」

アムロ「そんなじゃあやわらか回収してくるわ。ってやわらか、その人どうしたの?」

(っ・ω・)っ けがしたので たすけました

ガルマ「うーん」↑まだ気絶中

こうしてホワイトベース隊のみなさんはどうにかジオン勢力圏からの脱出に成功するのです。

ガルマ「うーん…はっ!?!ここは!?!」

ブライト「ホワイトベースの中だ」

ガルマ「連邦軍!?!私は捕まったのか!?!」

ブライト「そうなる」

ガルマ「くっ殺せ！」

リュウ「いや、せつかく生きてたんだし、死ぬ事はないだろ。」

ブライト「そうだぞ。捕虜にはなってもらうがちゃんと南極条約に従った扱いはする」

リュウ「それに、敵さんにこんな事言うのも何だが、生きてりやそのうちいい事もあ
るさ」

ガルマ「そ、そうかなあ」

リュウ「そうだ。お前さんを助けたやわらかのヤツも心配してたから後で顔だして
やってくれ。」

ガルマ「(ヤワラカ? ってなんだ?)」

ガルマ「そんなわけでヤワラカ? とやらのところに来たんだが」

コタツ「(ω・ω) ノ どーも。ガルマさん。やわらかボールです。」

ガルマ「このまるっこいのは何なんだ?」

コタツ「*(ω・ω) よくゆわれます」

ガルマ「いや、褒めてないとは思うけど…」

リュウ「で、突撃してきたガウを受け止めてついでにお前を助けたのもコイツな?」

コタツ「(ω・ω) ノ けが へいき?」

ガルマ「ああ、うん、おかげさまで」

コタツ「*・ω・」よかた！

ガルマ「(しかし、これからどうなるんだろう…)」

大西洋に逃げたホワイトベースは未だに連邦本部とのまともな通信もできません
もちろんガルマが生きてホワイトベースにいる事はジオン軍はもちろん、

ホワイトベース隊以外の連邦軍も知らないのです。

はたして、この先どうなるのやら!?

やわらかボールとククルス・ドアンの島（前篇）

色々あつてガルマを載せたホワイトベース一行は大西洋をヨーロッパ方面へ進んでいました。

コタツ「*・ω・」はぁー。ぬくぬくですね

ハヤト「そうですねー」

カイ「おーい、お坊ちやま、ミカンなくなりそうだから取つて来てくれよ」

ガルマ「なぜ私が…」

リユウ「おいこら、捕虜を虐待してんじやねーよ。ほら。カイもハヤトも一緒にミカソとりにいくぞ」

カイ・ハヤト「はーい」

コタツ「?・ω・」ガルマさん げんきないです？

ガルマ「いや、友人と喧嘩をしてしまったのではないかとね」

コタツ「・ω・」そうですね。さびしいですね

ガルマ「そうだね。何が悪かったのかなあ…。シヤア…」

コタツ「つ・ω・」つ ガルマさんどんまい。（ふかふか

ガルマ「そうだね。気を遣わせてすまないね。」

セイラ「ちよつとよろしくて？」

ガルマ「はい。なんででしょうか？」

とやわらかコタツにセイラさんとガルマの二人。

これは何かありそうな予感？

セイラ「あなた、シヤアⅡアズナブルというジオン軍士官をご存知？」

ガルマ「シヤア：知っていますとも。彼とは士官学校で一緒に頼れる部下であり自慢

の……友人：でした」

セイラ「そうですか、彼の出身や生年月日などは知っています？」

ガルマ「ええ。知っています。士官学校ではお互いにプレゼントを交換したこともあ

りますよ」

セイラ「(出身地は偽つても誕生日までは誤魔化さなかつたのね。変なところで律儀

なものやはり……)」

セイラ「ああ、シヤアは兄さんだったのね……。間違い無かつた。」

ガルマ「うん？シヤアに妹？そんな話は聞いた事がなかつたが……」

セイラ「ああ、ごめんなさい。何でも、何でもないの」

ガルマ「いや、そんな涙まで流されて何も無いはないと思うのですが……」

コタツ「…ω・ω」 セイラさん…

カイ「ああー?!?!? お坊っちゃん!? てめえ何セイラさんを泣かせてるんだよ!?!」

ハヤト「これは見過ごせませんね。場合によつては…」（拳パキポキ

ガルマ「違うんだ!? 誤解だ!?!」

セイラ「いえ。ガルマさんに婚約者さんとの馴れ初めや離れ離れになった経緯を聞いていたら…感動してしまつて。ね? ガルマさん」

ガルマ「お、おう。何もやましいことはない」

リュウ「ふむ。やわらか。本当に何もやましいことはなかつたか?」

コタツ「…ω・ω」 セイラさんとガルマさんおはなししてただけです

リュウ「そうか。悪かつたな」

ガルマ「いや。構わない。」

カイ「つていうかお前婚約者とかいるのかよりア充かよくあー! これだからお坊っちゃんは!! うりうり!!」

ガルマ「痛い痛い!?! やめないかっ!?!」

と、その時、艦内放送で…

ブライト『手すきの者は手近なモニターに注目せよ。全周波数で流されているジオンからの緊急放送である。』

ギレン『諸君の愛してくれたガルマは死んだ!!何故だっ!』

ガルマ「……………」

ハヤト「……………」

リユウ「……………」

セイラ「……………」

カイ「……………」

アムロ「……………」

コタツ「ω・ω……………」

ガルマ「生きてますけどおー!?!?」

カイ「やつべｗｗｗｗおもしろすぎるｗｗｗｗガルマお前国葬されてんぞｗｗｗｗ

W遺影ｗｗｗｗでかすぎｗｗｗｗ」

ハヤト「カイｗｗｗｗさんｗｗｗｗわらいｗｗｗｗすぎｗｗｗｗｗｗ」

リユウ「いや、連邦本部との通信もまともに出てなくてな。ヨーロッパ大陸まで行け

ばガルマの無事も伝えられるだろうが…」

ガルマ「つていうかセイラさんまで笑わなくても!?!」

セイラ「いえ…ごめんなさい…ぶっ……………」

ガルマ「(これ、帰っても居場所あるんだろうか…?)」

コタツ「っ・わ・っ」（ガルマさんふかふか

と、そんなおり、しばらく黙って見ていたアムロがつかつかとモニターに近寄り

アムロ「うおおおおお！」モニターパンチ！

ガシャーン！

アムロ「もう、見なくてもいいだろ。」

セイラ「アムロ手大丈夫!？」

アムロ「ああ、平気平気。」

ガルマ「気を遣わせてしまったようですまない、ありがとうアムロくん。」

カイ「なんか俺らも笑いすぎてスマン。」

ハヤト「ガルマさんもアムロも悪かった。」

カイ「でもよおー？何もテレビ壊さなくてもいいだろおー？」（アムロの肩がし

ハヤト「そうですよ、昭和のお父さんじゃないんですから」

コタツ「*・わ・っ）みんななかよし

とかやっていると艦内放送がなります

フラウ『レーダー内にザクを発見。ガンダムとコアファイター出撃してください。』

アムロ「らじゃー。じゃ、行ってくる。」

リュウ「おう、行ってくるからな」

でもって

アムロ「やっつけてきた」

一同「「はや!?!」」

アムロ「いや、一機だけだったし。」

リュウ「しかし、アイツなんかおかしかつたよな。脱走兵がどうか言ってたし。」

ガルマ「私のせいで迷惑を掛けてしまっただろうか？」

カイ「ないない。さっきまで国葬されてたやつを脱走兵として追跡するなんてどういう状況だよ。」

リュウ「とりあえず、ブリッジに行つてブライトに報告してくる。行くぞアムロ。ガルマもあんまり変な事で気に病むもんじやないからな」

アムロ「らじゃー」

そしてブリッジに行くと

タムラ「実はブライト艦長。先日の戦いで塩の備蓄庫が被弾してしまつて、塩の残量が残り僅かです。」

ブライト「それはまずいな…。」

ホワイトベース料理長のタムラさんとブライト艦長が深刻な顔をしています。

タムラ「なんとか塩の補充をお願いできませんか？」

リュウ「うん？どうした？塩がないのか？」

タムラ「ええ。幸い、現在大西洋の群島地帯を航行中です。どこかに少し停泊しても
らえれば海水から塩を採れるのではないかと……」

リュウ「そんなに簡単なものかね？」

タムラ「ええ！大昔の人達はそうやって塩を得ていたんですよ！」

ブライト「うむ……。ここのとこ連戦続きだったしな。1日くらい停泊しても何とか
なるかもしれない。ミライくん。航行スケジュールを出してくれ。」

ミライ「たしかに、1日程度なら十分取り戻せる遅れね。」

ブライト「特にアムロには連戦を強いてしまっているからな。ここらで半舷休息をと
るのもいいかもしれない。」

ミライ「それなら、ここの小島へ停泊してはどうかしら？」

ブライト「よし、進路をその島へとれ。無事停泊できれば半舷休息をとる」

一同「「ひやつほー！！」」

ホワイトベースは一路、近くの小島へ進路をとるのですが

その小島では……

ドアン「うん？あれは!?連邦軍がこちらへ向かってくる!?ロラン、子供達を家の中の
地下室へ頼む。」

ロラン「わかった。あなたはこうするの？」

ドアン「ザクで出る。話の通じる相手であればいいが。」

その島に住んでいるククルス・ドアンは自身のザクに乗り込みます。

もちろんそれはホワイトベースにも伝わっており：

リュウ「またザクかよ！」

カイ「またアムロにガンダムで：おい、アムロどうした？顔が真っ青だぞ？」

アムロ「ああ……あれは：戦っちゃいけない相手だ。」

ハヤト「アムロ、お前、顔真っ青だぞ。」

カイ「どう見たってあのザク、普段戦つてるヤツより弱そうだろ？武器ももってなさ

そうだし、なんかやたらほっそりしてるし。」

アムロ「ダメだ……。あれと戦って勝つイメージが見えない。」

リュウ「ブライト、アムロの様子がおかしい。」

ブライト「そうか。あのザク、攻撃する意志はないようだし、少し様子を見よう。」

やや離れて様子を見るホワイトベースとドアンのザク。

ドアン「聞こえているか。連邦軍。こちらには攻撃する意志はない。今すぐこの場を

立ち去って欲しい。」

とそのとき……

。。。　（　・　ω　・　）　よいしょ（のそのそ

どっぽん

やわらかボールが海に飛び込んだ！

博士「そしてこんなこともあるのかと、やわらか用浮き輪も既に用意しておいたのさ
！ぼちつとなー！」

海の上に着水すると、大きな浮き輪でぶかぶかと浮かぶやわらかボール。

浮き輪一・ω・（ぶかぶか

ドアン「なんだろう、この丸っこいの！」

アムロすら畏怖するククルス・ドアン。

その目の前に降り立ったやわらかボール。

果たしてやわらかボールの運命は!?

後編に続くぞ！

やわらかボールとククルス・ドアンの島（後編）

ククルス・ドアンの駆るザクと対峙するやわらかボール！

浮き輪一・ω・）ノ　ドーも。やわらかボールです。

ドアン「どうも。ククルス・ドアンです」

挨拶は大事

ドアン「ふむ。武器を持たずに来たということは争いにきたわけではないのかな？　一体何をしに来たんだ。」

浮き輪一・ω・）　あそびにきました

ドアン「は？」

浮き輪一・ω・）ノ　あそびにきました。あそんでください

ブライト「あ、いや、こちらは休息を取りに偶然この島に立ち寄っただけなんだ。害意はない。」

浮き輪一・ω・）　そういうことです

ドアン「だったら立ち去って欲しい。こちらもザクには乗ってるがジオン軍というわけではない。」

浮き輪一・ω・）？

ドアン「ああ、私はいわゆる脱走兵というヤツなんだ。ちよつと色々あつてね。こゝで子供達と暮らしている。自給自足の暮らしというヤツだな」

浮き輪一・ω・）ドアンさんえらい

ブライト「なら、取引できないか？コチラは生活物資を供出できる。1日の停泊と情報、それに塩が余つていればくれると助かる。」

ドアン「…詳しい話がしたい。非武装の代表者を寄越してくれ。」
そんなわけで、ドアンさんはブライトさんとお話をします。

その間

（#・ω・）ノ　こんにちわ。やわらかボールです。

タチ「なんだこの丸っこいのー」

クム「よわっちそー」

チヨ「へんなのー」

（#・ω・）　へんじやないです

タチ「あ、でもコイツすつげーやわらかい！」

（つ・ω・）　つ　やわらかボールですから。（ふかふか

やわらかボールは島で暮らしてる3人の子供達と遊んでました。

ブライト「ドアンさんと話がついたぞ。」

ブライトさんはドアンさんが脱走兵となって、この島で戦争孤児の子供達と自給自足に近い生活をしていることを知りました。

そして、いくつかの生活物資と引き換えに余剰の塩を交換してもらうことにしたのです。

さらに

ドアン「それだけの塩では心もとないだろう。手造りではあるが製塩施設もここにはあるからな。塩を作って行くといい。」

と、ドアンさんに塩づくりを教えてもらえることになりました。

(・ω・)ノ お手伝いします

アムロ「お手伝いします。」

リュウ「お手伝いします。」

カイ「お手伝いします。」

ハヤト「お手伝いします。」

ガルマ「お手伝いします。」

セイラ「お手伝いします。」

ドアン「じゃあ、やわらかボールとガルマくんとセイラさんは子供達と薪にする流木

を集めてきてくれるかな？」

タチ「しようがねえな！やわらかいのと前髪とねーちゃんだけじゃ心配だもんな！」

クム「流木がたくさん流れ着くのはあっちの方だよ」

チヨ「やわらかいこー！」

。。。 （・ω・） わかりました（のっそのっそ

ドアン「リュウくん、アムロくん、カイくん、ハヤトくんは私と一緒にまずはこの箱にこの辺りの砂を詰めてくれるかい？」

リュウ「なんだ？海水を沸騰させればいいんじゃないのか？なんで砂なんだ？」

ドアン「うん。まずは濃い海水、灌水を作るんだ。その方が効率よく塩を作れる」

カイ「それと砂がどう繋がるわけ？」

ドアン「この辺りの砂は満潮時に波打ち際になるんだ。今は引き潮で大分時間も経っているから大分乾いていい具合に塩分を含んでいるんだ。」

ハヤト「へえー。。。じゃあ次は？」

ドアン「この砂に海水を注げば、さらに塩分濃度の高い海水、つまり灌水が出来上がるのさ。」

カイ「なるほどなあー。。。じゃあこの箱の中に砂つめて海水突っ込んで、そつからどうやって水だけとるのさ？」

ドアン「うむ。この箱の下の方にパイプがついていて、そこには目の細かい布で出口をふさいである」

アムロ「もしかして：濾過装置も兼ねてる？」

ドアン「ほう？察しいじゃないか。まず砂を敷き詰めた後に小さな砂利を敷き詰めてさらにその上に大き目の砂利を敷き詰めるんだ。そうすると簡易濾過装置になるわけだ。」

リユウ「すごいもんだなあ。ドアンさん。どうやってそんな事を覚えたんだい？」

ドアン「なに。生きるのに必死だっただけさ。さ、薪が来る前に濾過装置とカマドを作ってしまおう。」

一同「おおー！」

一方、薪にする流木を集めている組は

チヨ「いい？打ち上がって乾いたヤツを集めるんだよー？」

ガルマ「ふむ。君は物知りだな。」

タチ「お前がモノをしらなすぎなんだよ。ナヨつちい兄ちゃんつ」

クム「あ、ねえちゃん、でかすぎるヤツは燃えづらいから薪にするのはこのくらいのヤツがいいんだぜ」

セイラ「あら、そうなのね。」

（っ・ω・）っ　そして、あつめた薪を運びます

セイラ「やわらかボールは力持ちね」

（*・ω・）　てれるぜ

ガルマ「ところでセイラさん。君はシヤアと知り合いか何かなのかい？」

セイラ「え、ええ。私の親類かもしれないと思っていました。あなたの話で確信を持ちました。」

ガルマ「そうだったのか…。」

セイラ「今度はこちらが聞いても？シヤアIIアズナブルの話をするときにやけに辛そうにするのは何故なんです？」

ガルマ「それは…ニユーヤークでの戦いするとき、私がガウで木馬に突撃する直前にね…。」

ガルマさんはセイラさんにその時、シヤアと交わした会話の事を話しました。

セイラ「（兄さんは復讐の為に正体を隠してジオン軍に入ったのね…。）」

ガルマ「シヤアとはいい友人のつもりだったのですが…。何か怒らせるような事をしたのかなあ…。」

セイラ「（この人ぜんっぜん気付いてない!）」

ガルマ「しかし、こうして生かしてもらえて感謝しています。あのまま何もわからぬ

ままケンカ別れとあつては死んでも死にきれませんからね。」

セイラ「ガルマさんは、今でもシャア・アズナブルと仲直りをしたいと？」

ガルマ「当然です」

セイラ「そうですか。あなたはとてもいい人なのですな。」

タチ「よーし！これだけあれば足りるだろ！一度もどるぞおー！」

(・ω・)ノ はい

セイラ「また後でお話ししましょう。私にも少し考える時間が必要な事ができました」
そうして、たくさんの薪をやわらかボールのリユックに入れてドアンさん達のところに戻つてみると

大きな箱を使った簡易濾過装置と、石で組み上げた簡易カマドが既に出来上がっていました。

ドアン「よし、薪も来たし、灌水を作ろうか。」

カイ「よしきた！ハヤト、やるぞっ」

ハヤト「はい！」

カイさんとハヤトくんの二人は既に汲み上げていた海水を簡易濾過装置に流し始めました。

リユウ「ちなみに、この海水もドアンさんが考えた水質浄化装置を使ってるんだぜ？

すげえよなあ」

ドアン「いや、貝殻をまとめた網を防波堤内に沈めてあるだけだよ。」

ガルマ「それがどうして水質浄化に繋がるんだ？」

ドアン「ああ、それは、貝殻についている細かな凹凸が微生物の棲家になって、その微生物が汚れを食べてくれるんだ」

ガルマ「そうなのか…」

リュウ「俺達も最初聞いたときは信じられなかったんだけど、本当の事なんだ」

ドアン「自然の力というのは思っているよりも力強いものだね。」

セイラ「こうしてみると、地球環境を回復させる宇宙移民政策の目的も間違っていないなかつたのですね。」

ドアン「そうかもしれないな。さ、灌水を大鍋にいれて火にかけようか」

それから

(つ・ω・) つ おなべにかんすいをたしたり

つよくなりすぎないように、ひをちようせつしたり c (・ ω ・ c)

(・ ω ・) || 3 のんびりしたりします

カイ「しっかし不思議だよなあ」

ハヤト「何がです？」

カイ「いやなに、木が燃えてるのって見てると何かあきねーなと思ってさ」
ハヤト「言われてみればそうですね。コロニーで火なんて燃やしたら怒られますから

ね」

カイ「環境がどうのこうのーって言われてなw」

ハヤト「地球。いいところすねー」

カイ「地球。いいとこだなー」

そんなこんなで塩づくりはのんびりと進んで行ききました。

ドアン「で、灌水を蒸発させていくと塩が結晶化するから、それを取り出して、天日に晒して残った水分をとばせば一応の完成だ」

リュウ「結構とれるもんだな」

ドアン「途中で灌水を足しながら煮詰めたからね。」

ガルマ「しかし、知識としては知っていたが本当に出来あがるとは…。なんというか感慨深いものがあるな」

ドアン「さ、塩を干し場に運んでくれ。日が出ているうちが勝負だからな」

ガルマ「ああ。わかった。」

アムロ「手伝います。」

ドアン「私も一緒に運ぼう。」

ガルマ「ところで、君はどうして脱走兵になったのかな？」

ドアン「地球降下作戦の際にね。私はあの三人の親を戦鬪の巻き添えにしてしまったんだ」

ガルマ「そうだったのか…」

ドアン「そればかりか、私の上官はあの子供達も殺せと命令したのさ。ジオンを恨んで育てば遺恨を残すとか言ってるね」

ガルマ「そんなバカな!? 民間人への攻撃は南極条約違反になるのに!」

アムロ「ボクたちも元々は民間人だったんですけどね。サイド7ではたくさんの民間人もザクの攻撃で…」

ドアン「私にはあの子供達を殺す事は出来なかった。命令違反で殺されるつもりもない。だから子供達を連れて逃げたのさ」

ガルマ「…ククルス・ドアン。君はあのザクを捨てるべきだ。」

ドアン「だが、ザクがなければ追手を追い払えない。」

ガルマ「あのザクは初期の地球降下作戦で使われたものだろうか？ それには予定外の場所に着地しても行方がわるよう、発信器を仕込んであるんだ」

アムロ「そういえば、途中でやつつけたザクがいたけれど、アイツはドアンさんを？」

ガルマ「おそらく、発信器を頼りにドアンくんを探しにきたんだろう。既にアムロく

んが倒したようだがね」

ドアン「つまり、あのザクさえなければ、もう私達は追われる事もないと？」

アムロ「でも、どうしてそれを？軍機なんじゃあ…」

ガルマ「ドアンくんには世話になったし、地球方面軍司令として迷惑もかけてしまったようだからね」

アムロ「なら、あのザクをホワイトベースで引き取れないかブライトさんに相談してみます！」

ガルマ「よろしく頼むよ。」

そういうわけで、ドアンさんはホワイトベースで留守番してるブライトさんのところに行きます

ブライト「そういうことなら。」

ミライ「無傷のザクを鹵獲できるのはこちらにも嬉しいですが、ドアンさんはザクがなくなつて平気なの？」

ドアン「正直言えば、何かあつたときに逃げ出す手段がなくなるのはツライな…」

ブライト「なら、ホワイトベースに備え付けられている海洋用の救難艇を一つ譲ろう。」

ドアン「本当にいいのか？非常に助かるが…」

ブライト「戦闘で失った事にしておくから、連邦軍のものだとわかるような痕跡は消しておいてくれよ？」

ドアン「ああ、わかった。ありがとう」

そうして日も暮れていく頃

リユウ「塩、できたな」

ドアン「うん、上出来だ。」

、（・ω・）ノ ばんじやーい

アムロ「やわらか頑張った」（なでなで

（*・ω・）||3 えっへん

アムロ「何か大切な事を、今日学んだような気がするよ」

ドアン「それはよかった。」

アムロ「ドアンさん、ありがとうございます。」

ドアン「私は何もしていないよ」

アムロはドアンさんと固く握手をすることでした。

そして、その日の夜はドアンさんの島でのんびりするホワイトベース一行でした。

そんな夜、ガルマさんはやわらかボールと浜辺を散歩するのです。

。。。 （・ω・） よるのさんぽ。おとなっぽいです

ガルマ「そうだね。君と一緒にだから私の散歩も許可してもらったよ」

(・ω・)？　ところでガルマさん、なにをもっているんですか？

ガルマ「うん。これは空き瓶に手紙を詰めたものなんだ。」

(・ω・)？　おてがみですか？

ガルマ「私の婚約者だった人に手紙を送りたいけれど、この状況じゃあ送れないから運だめしにねっ！」ぽーい

ガルマさんは手にしたピンを海に向かって放り投げました。

ガルマ「運がよかったら、きつとイセリナのところが届くかもしれないね。」

。。。 (・ω・)　そういうえぼおてがみもらったことないです。

ガルマ「そうか…。うーん…そうだなあ…。じゃあちよつとだけ待ってくれないかな？」

ガルマさんは少し立ち止まると持っていた手帳に何かを書きつけてそれを破り取るとキレイに折リたたんで、もう一度そこに何かをかきつけます。

ガルマ「やわらかボールくんはガルマ・ザビさんからお手紙ですよ。」

(*・ω・)　おてがみもらいました！

ガルマ「さ、どうぞ。」

、、シ、ω、)ノシ　よんでもいいですか

ガルマ「もちろん」

『やわらかボールさま

たすけてくれてありがとう。

きみがたすけてくれなかったら、こうして　ちきゆうが　うつくしいことをしらない
ままだった。

それにいきていけば　まだ　できることがたくさんある

だから　おれいのおてがみを　かきました

もういちど、ありがとう。

ガルマ・ザビ』

、（*・ω・）ノ　おてがみうれしい！

ガルマ「そうか。喜んでもらえてよかったよ」

（*・ω・）||3　あとではかせに　たからものいれにいれてもらいます

そうして、夜も更けていき

翌朝、ホワイトベースは出発します

アムロ「ドアンさん。上手く言えないけどあなたには大切な事を教わった気がしま
す」

ドアン「私は何もしていないさ。何かに気付いたというならそれは君自身が見つけた

んだ。大切にしたらいい」

アムロ「はいっ！」

リユウ「戦争が終わったらまた色々教えてくれよな」

カイ「俺は肉体労働はごめんだけどな」

ハヤト「とかいいつつ、結構楽しそうに作業してたじゃないですか」

ブライト「さあ、そろそろ出発するぞ」

ドアン「みんな気をつけてな」

ドアンさんのお見送りのもと、ホワイトベースは再び旅立ちます。

ドアン「なかなか見どころのある若者達だったじゃないか」

ドアンさんはホワイトベースが見えなくなるまで見送るのでした

そして、ホワイトベース内では

コタツ「ω・ω」

ガルマ「ふうー」

セイラ「あの、ガルマさん、少しお話ししても？」

ガルマ「はい、なんでしょう？」

はてさて、セイラさんのお話とは一体なんでしょう？

次回に続くぞ!!